

月刊神戸っ子震災10年記念号

◆KOBECO

kobecco.co.jp

2005年1月28日発行 第13巻 第8号
通巻522号 昭和10年1月20日 第一種郵便物許可



この街で、出会う。



JEWELRY タジマ

神戸市元町2丁目 TEL.078(331)5761

白雲

至
神
子
が
え
る

佐
望
月

美

月刊 神戸つ子震災10年記念号を発行する会

佐
望
月

書/望月 美佐

受け継がれる“時”



時計やジュエリーは「今」のためだけに
あるのではない
遠い未来においてもきっと誰かが
それを大切に使いつづけているはず
美しい時計やジュエリーのその機能美、精神的価値は
ずっと色褪せることがない
愛する人から受け継いだ、世界で一番魅惑的なもの
それは世代を超えて輝きつづける
よいものを世界から。正統な扱いで。

神戸 三宮 カミネ

Since 1906 Kobe
kamine
Fine Jewelry & Watches



2005
本年もカミネを
よろしくお願ひいたします



since 1906 Kobe
kamine
Fine Jewelry & Watches

「さんちか」は
神戸・三宮のショッピングエントランス

季節ごとに楽しめる おしゃれ・グルメ

電車やバスを降りたら、そこは「さんちか」。

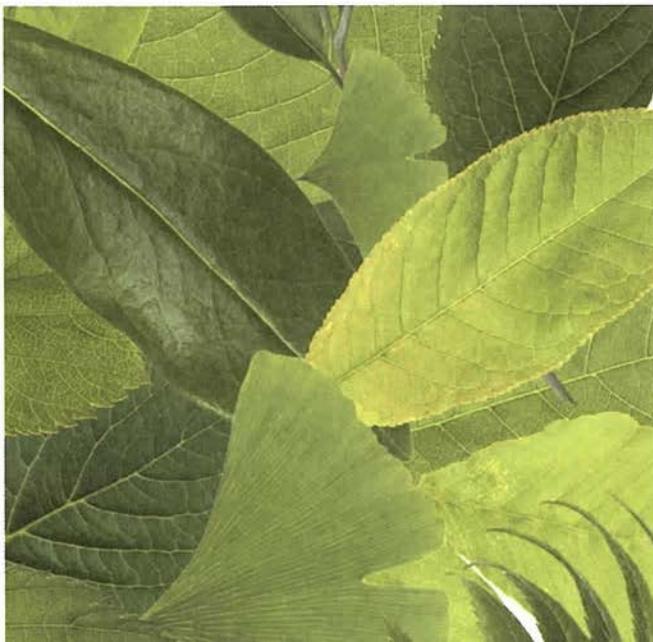
ショッピングやお食事を楽しんだら、

そのまま帰れるターミナルにあるさんちかは、

素敵な暮らしの情報ステーションでもあります。

ショッピング、グルメ、わくわくするイベントの数々を、

おしゃれ感覚でお楽しみください。



さんちかメンバーズカードは、より便利に、よりお得にパワーアップ!
インターナショナルなさんちかメンバーズカード



さんちかメンバーズカード
Orico Card/Master Card

さんちかメンバーズカード
Orico Card/VISA

さんちかメンバーズカード
Orico Card/JCB

ポイント1 全てのショッピングご利用にポイントがつく!!

ポイント2 ご利用金額に応じてボーナスポイントもたまる!!

ポイント3 JALマイレージ、ドコモプレミアクラブへのポイント移行も可能!!

ポイント4 多彩な商品との交換も可能!!

さんちか名店会
神戸市中央区三宮町1-10-1 TEL.078(391)3965
営業時間／AM10:00～PM8:00
(飲食店はPM9:00オーダーストップ)

santica
The New Heart of Kobe 神戸・三宮さんちか
<http://www.santica.com>

娘の
新!発見
まちとひとに素敵な笑顔を

■月刊神戸つ子震災10年記念号

書／井戸敏三（兵庫県知事）
絵／東山魁夷（日本画家）

元氣兵庫

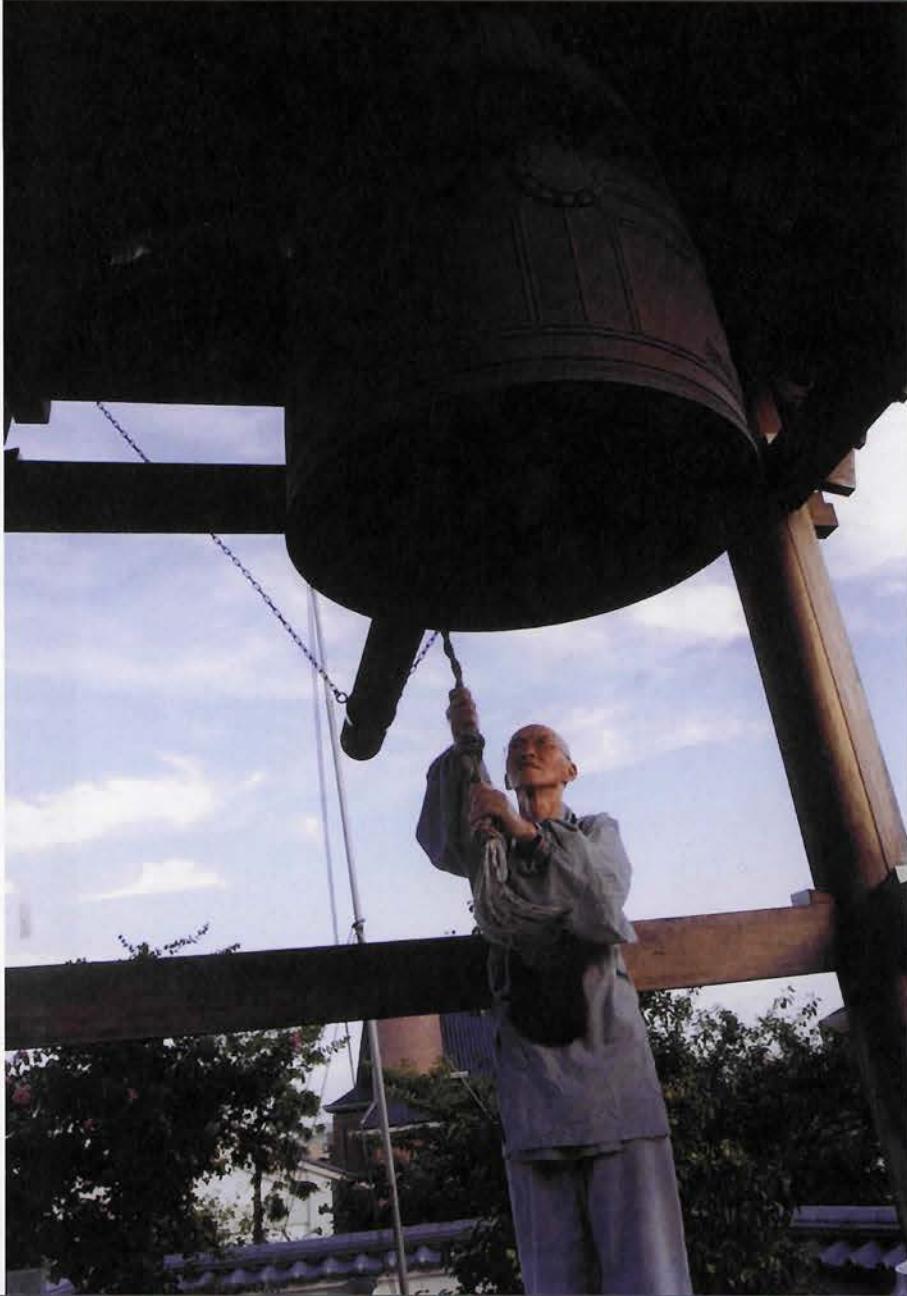
兵庫県知事 牛ノ敏三

書 団



波齧く磯 The Waves Beating on the Beach 1983年

ANGLE KOBE



5:46 am

Jyotokuji Temple
Higashiyuenchi Park

Photo Mann Kikuchi





震災で亡くなられた
津高 和一作
足音(イマブ) 1958
油彩・カンヴァス
97.0×130.5

鎮 魂

1995年1月17日5時46分、阪神・淡路大震災により
6533人の方々がお亡くなりになりました。

震災から10年を経て、その御靈を慰め、心よりご冥福をお祈りいたします。 合掌

スマトラ沖地震・インド洋大津波で犠牲になられました方々の御靈に追悼の意を表すと共に、一日も早い災害復興の道を歩まれますことをお祈りいたします。

月刊神戸っ子震災10年記念号を発行する会

SECOND COVER



2003
5・10～5・12

NHK壁画



全壊し再建するNHK神戸放送局新会館の壁画
中西 勝画伯と神戸二紀会制作

「うま、なあ、むか、い」

なにか、励ませ、という。そんな電話が、「神戸っ子」の大谷さんからかかってきたとき、その声に、雄々しい思いがした。灰塵のなかで、物を——未刊の号を——生みあげようという。それも、隣人にことばをかけよ、といふ。

当方は大阪にて、連日、神戸の惨禍の報道に漬かつていて、自分が被災者でないことが申しわけないという気持ちでいたときに、そんな電話がかかってきた。

たまたま、毎月一回連載している「風塵抄」の原稿を書いていたときだった。十年ほど前、「神戸っ子」の小泉美喜子さんと、生田神社だったかのまわりの小路をぬけて通りいでようとしているとき、彼女が、

「神戸が大好きです」

といった。つづいて、あまり神戸がいいために、よそにお嫁に行つても帰つてくる人が多いんです、と彼女がいったので、私はユーモアだと思い、笑つた。
ところが、小泉さんは、真顔だった。

「ほんとです」

彼女は、いつた。

そんなことを思いだしつつ、「風塵抄」を書きはじめ、あの惨禍のなかで、神戸の人達が示した尊厳ある存在感

に打たれた、という旨のことを書いた。

家族をなくしたり、家をうしなつたり、途方に暮れる状態でありながら、ひとびとは平常の表情をうしなわず、たがいにたすけあい、わずかな救援に、救援者が恥じ入るほどに感謝をする人も多かった。

神戸に、自立した市民を感じた。世界の他の都市なら、パニックにおちいつても当然なのに、神戸の市民はそうではなかつた。

無用に行政を罵る人も、まれだつた。行政という、“他者”的立場が、市民にはよくわかつていて、むりもないと考える容量が、焼けあととのなかのひとびとにあるといふ証拠だつた。

扇動をする人も、登場しなかつた。たとえそんな人がいても成熟した市民を感じさせるここの人達は、乗らなかつたろう。

えらいものだつた。

この精神は、市民個々が自分のぐらしを回復してゆくことにも、きっと役立つにちがいない。

神戸。

あの美しくて、歩いているだけで気分のよかつた神戸が、こんどはいつそう美しく回復する上で、この精神は基本財産として役立つに相違ない。

神戸。

と、私はつぶやきつづけている。

やさしい心根の上に立つた美しい神戸が、世界にただ一つの神戸が、きっとこの灰塵の中からうまれてくる。

(一九九五・一・二三五)

神戸これからも

詩 安水 稔和

画 小磯 良平

あのとき亡くなつた人がいて
涙と声と苦痛。

あのあといなくなつた人がいて
悲しみと願いと歌。

それでも生きのびて

それだから生きてきて。

すべてが変わつたようで
すこしづつ遠ざかるようで。
それでも変わらない
いのちの喜び。

忘れず思い出し

忘れてなくりかえし思い出し。

あれから十年。

これから

生きていく。

これからも

わたしたち生きていく。



小磯良平「齊唱」

KOBECCO 2005

ナビル・シェハタ （コントラバス奏者）
林典子 （ピアノ奏者）

一息の合った
コントラバスとピアノ伴奏 —

今シーズンよりベルリンフィルハーモニー管弦楽団のコントラバス首席奏者として活躍中のナビル・シェハタは25歳。

三宮のクラシックライブハウス「ピア・ジュリアン」で昨年の11月11日開かれたナビル・シェハタのスペシャルナイトライブは、プロの演奏者たちも酔わせるテクニックと深みのある情感を弦に響かせた。ピアノ伴奏の林典子は神戸っ子。ナビル・シェハタとのコンビはすばらしく、ぴったり合つた演奏は感動的だった。



ライネに師事。ドイツ国立奨学金を授与、バルドー室内オーケストラのソリストとして客演。2003年9月からベルリン国立歌劇場の首席奏者。数々の国際コンクールで優勝し、ベルリンフィルの首席奏者に。林典子は、神戸女学院大学音楽部のピアノ科卒業、同専攻科修了。ドイツ・ビュツアブルグ音楽大学大学院コンサートディプロムを取得終了、同大の伴奏要員となつてヨーロッパ各地で演奏、特に伴奏者としてコントラバス国際コンクールに出場して一位となる実力派。ナビル・シェハタとの出会いは、さらに彼女の伴奏に彩りを深め、これからのお共演が楽しみだ。

14回

口ドニー賞授与式



KOBECCO 2005

松本 巧

〈NPO国際チェロアンサンブル協会理事長・㈱串乃家代表取締役社長〉

—1000人のチェロ・コンサート ディレクター—

2005年5月22日、神戸ワールド記念ホールにて第3回「1000人のチェロ・コンサート」が、M・ロストロボーヴィチの指揮により開催される。今年は阪神・淡路大震災10周年にあたり、高円宮妃久子様を名誉総裁にお迎えしてのチェロ国際フェスティバルだ。

チェロ弾きの「ゴーシュならぬ、チェロ弾き・松本巧さんは、1950年愛媛県生まれ。同年神戸に移り、関西学院大学文学部（音楽美学専攻）を卒業後、串かつ店「串乃家」の社長に。震災のまち神戸に、何とか人を呼び戻したいと、500人のチェロコンサートを企画。高円宮様にチェロを弾いていただき、さらに名誉総裁にとお願いしたところ、高円宮様は全国に呼びかけて

1000人のチェロコンサートに、と提言された。1998年、松本さんをオーガナイトディレクターに、第1回のコンサートが開催された。

1000人のチェロ演奏は夢の実現。人の心を癒す音と、涙を流しながら彈く人々の響きは感動を与えた。「3、4年に一度は開催しましょう」とおっしゃっていた高円宮様のご遺志を継いで、第3回の今年は、久子妃殿下をお迎えしてのコンサートにむけて、準備に忙殺されている。現在はNPO国際チェロアンサンブル協会理事長。日本チェロ協会評議員。神戸風月堂が主宰する「口ドニー賞」を、本年受賞した。



天皇、皇后両陛下が追悼

1月17日、兵庫県公館で開催された震災の犠牲者追悼式典に出席するため、天皇、皇后両陛下が神戸を訪問。震災で肉親を亡くした遺族にいたわりと励ましの言葉をかけられた。(神戸新聞社提供)

祈りを込めて「阪神・淡路大震災10周年追悼」

長田区の御蔵北公園では、ペットボトルにろうそくの灯りをともして「1.17みすが」の文字を。合同慰靈法要に対し遺族会から「かんしゃ」の文字も。終日多くの人が集った



震災10年垂水区より発信。震災のあつた5時46分に震源のひどう野島断層を目前で安心なまち垂水「安らぎのまち垂水」を祈願。また犠牲者を偲ぶため鎮魂祭パネル展示を開催した



神戸市立神陵台小学校祈念集会。全校児童・職員とP.T.A.地域の代表者がろうそくの灯りを前に、体験談を語り合った



天地への祈り

兵庫県神道青年会が、5時46分に弓弦羽神社を出発し、東遊園地の震災慰霊碑など被災地に忌み火をさげた。淡路島、伊弉諾神宮では自然と人の共生を祈る「天地への祈り」を行った





神戸市の追悼式典には約6000人が参列。矢田市長の式辞の後、1000人の児童たちが「幸せ運べるよう」を合唱した



地球規模で防災を考える

国連防災世界会議のプレシンポジウムが、神戸ポートピアホールで開催。パングラデシュ防災担当大臣より、スマトラ沖地震の被害についての報告が行われた

●コウベスナップ



1月17日、午前5時46分三宮センター街に「プロジェクトX」が映像で完成。風さやかさんが「5時46分」を熱唱した

5時46分を、
三宮センター街で歌う風さやか



1月16日 全竣工したNHK神戸放送局の新しい会館
がトアロードによみがえり 17日から発信

ひょうごゆかりの洋画家100人展

1月18日から31日まで、被災者の心を癒し励ました絵画展が。震災の犠牲となった津田和一、大島幸子、上田清一の作品が目を引いた

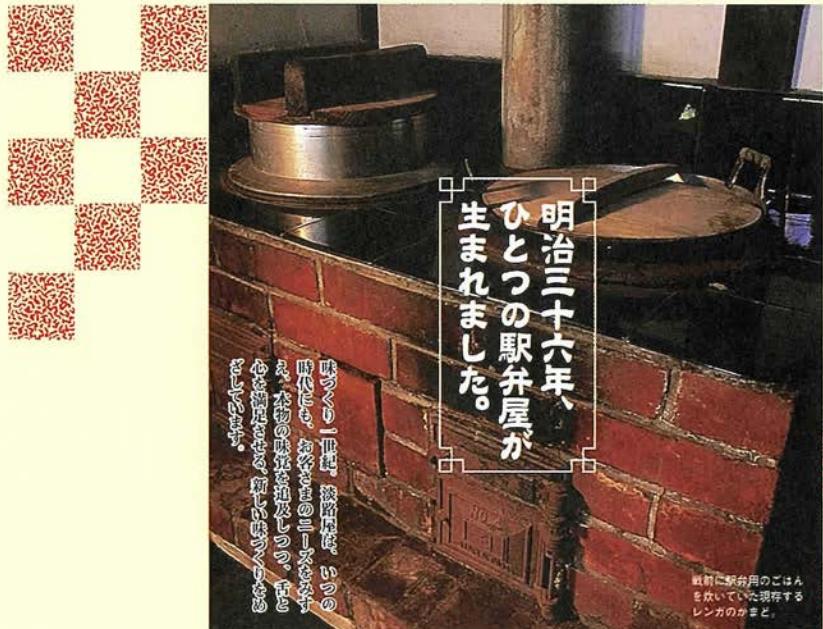


AWAJIYA

SINCE 1903

季節のおいしさたっぷり充実のお弁当ラインアップ。

和風、洋風、中華風とバラエティゆたか。
四季折々とりどりの味をたっぷりご満喫いただけます。
いつでも、どこへでもあなたのお供に……。



お弁当の
株式会社

淡路屋

〒658-0025 神戸市東灘区魚崎南町3丁目6番18号 FAX(078)431-1681
<http://www.awajiya.co.jp>

電話でご注文を承ります。

☎(078) 431-1682

(イロハニ)

ご指定の時刻に

ご指定の場所にお届けいたします。

表紙／石阪春生
セカンドカバー／
書・矢田立郎
絵・中西勝と神戸二紀会



目次／井藤雅博「ブルージュの橋」

震災10年記念号 目次◆2005

- 5 月刊神戸っ子震災10年記念号表紙／書・井戸敏三 絵・東山魁夷
6 ANGLE KOBE／菊池満
10 世界にただ一つの神戸／司馬遼太郎 写真・米田英男
14 KOBECCO 2005／ナビル・シェハタ、林典子／松本巧
16 神戸スナップ
20 神戸文学散歩／「少年H」同窓生と神戸を歩く 妹尾河童 撮・菊池満
24 特集／震災10年特集
 Welcome Kobe ①加藤隆久 ②かどもとみのる
 どないすんねん神戸 ①田中まこ ②村上美穂
30 月刊神戸っ子震災10年記念特集／震災10年100字メッセージ1
36 2005 神戸南京町春祭節
38 祈り・神戸栄光教会献堂式／安田丑作
40 「Jr.バタフライ」を語る／三枝成彰さん、佐藤しのぶさん
42 ひょうごゆかりの100人絵画展
44 小さな旅／福山・しまなみ海道
46 和のインタビュー／華道の伝統と今を語る／肥原頑甫
50 美と健康シリーズ／フトテクノ・ヒサコネイル
52 KOBE観光マンガT&B／藤原健二
55 私の意見／永吉一郎
56 月刊神戸っ子震災10年記念特集／震災10年100字メッセージ2

- 66 震災エッセイ／大谷成章
68 震災復興音楽対談／レオン・シュビーラーvs矢野正浩
74 有馬歳時記
76 でん太の教えてドクター／足立 優
78 プロフェッサーPの研究室／岡田 淳
80 イベントスケジュール
82 海・船・港／上川庄二郎
86 コーヒーカップの耳／文 出石アカル・え 菅原洸人・題字 六車明峰
88 月刊神戸っ子震災10年記念特集／震災10年100字メッセージ3
98 月刊神戸っ子震災10年記念号を発行する会会員名簿
100 ごあいさつ／石阪春生・小泉美喜子
102 表紙のことば
104 神戸っ子俱乐部法人会員ニュース
108 北野マップ
110 神戸うまいもん＆ドリンクNG NEWS
111 神戸百店会だより

写真／フォトスタジオ PROX

『少年H』の同級三人が神戸を歩く

妹尾 河童(かっぱ)
(舞台美術家・エッセイスト)



1.17 大震災を伝え続ける人と未来の防災センターで

林五和夫君から「『神戸っ子』の文学散歩」というページに登場してくれないか? 「少年H」に出てくる所を歩いてもらうという企画なんや」と電話がかかってきた。まるで編集部員のような口調だったのが可笑しかつた。

林五和夫といえば「少年H」を読まれた方には「横綱」という二ツクネームで登場していた少年だとお判りだろうが、彼とは六十八年来の友人である。長榮小学校から、神戸二中(現在は兵庫高校の卒業まで、十一年も一緒だったから、もう半世紀をとっくに越えた付き合いになる。「少年H」を執筆する際も、何かと協力してもらった。だから彼から「頼む」と言わわれると断れなくて困ることが多い。

今回もそうだった。「『震災十年を迎えて防災を語る』という講演会で神戸へ来るやろう。その前日に来てくれへんか? そしたら小倉君も一緒に歩いてくれることになつとるんやけど…」と断れない感じで迫った。

小倉宗夫君も同行すると聞いては、なお断れない。小倉君も「少

年H」に頻繁に登場している友人だ。彼にもずいぶん世話になつてゐる。中学時代の僕は、問題児だから先生によく殴られていた。

彼は、それを庇つてくれただけでなく、僕が家出をして廃屋化した教室に隠れ住んでいたときも、食料を運んできてくれた心優しい男である。「お前があんなことを書くもんやから、『昔は優しかった』んですね。今的小倉さんとは大違いや」とからかわれて困つとるよ」とこぼしているが。

新神戸駅から「千代」に直行して二人に会い、まず昼食を食べる。

『千代』はトアロードの川北病院の向かい側に入った所にある小さな店だ。「お好み焼」の提灯を掲げながら、実は美味しい広東料理を食べさせてくれる店なのである。

僕は帰神すると必ず「ただいま」と訪ねていたが、あの震災でこの店も壊滅してしまった。でも今は、被害の少なかつた自宅を改築して、再び元気に営業を続いているので、安心だし嬉しい。

この店には、「少年H」に登場する恩師の英語の松本先生、人文地理の内藤先生もお招きして食べていただから、懐かしくもご縁のある

る場所もある。我々七十四歳の三人も、少年時代に戻つて賑やかに食べた。

まず訪ね歩くスタート地点は、中央区脇浜海岸通りに出た「震災記念・人と未来・防災センター」に決めた。ここはかねがね訪ねたと思っていた所だ。

館内では、激震で街がどんなふうに崩壊したかを、臨場感ある映像と音でリアルに再現していた。さらに、被災した人々から集められた物や資料と共に、あの震災を体験した人が「語り部」として、来館者に当時の様子や防災の知識を伝えてたりしていた。

僕は「神戸に来る人には、必ずこの『防災センター』に連れて来てほしいなあ。ここを訪ねるとから案内をはじめると、今の神戸の街を歩くだけでは判らないものが見えてくるから」と、力説した。それは、空襲で炎上する街の中を逃げまどつた「H」の体験と震災が重なつたからだろう。今の日本の各地で地震が起り、被害が出ている現状を考えても、「阪神・淡路大震災」の教訓を伝える事は、戦争の愚を繰り返さないことを伝える



震災前に建て替った母校、兵庫高校を訪ねて／小倉・木村・妹尾・林（左より）



校内美術館で小磯良平の「踊り子」、壁面の校章（林君のデザイン）をバックに

かつた。



3少年は老いたが須磨の海と空は当時も今も変わらない

学校に着くと阪本校長が待っていたくれた。早速『美術館』のドアを開けてもらう。ここには二中を卒業した先輩画家の絵がズラッと並んでいる。小磯良平、東山魁夷、古家新、田中忠雄といった画家たちの作品群だ。高校に美術館があるのは、全国でも珍しいだろう。僕が二中に入学した頃は、校長室の壁に小磯良平画伯の『踊り子』の絵がかかっていた。部屋を訪ねて見せてもらった時、校長先生に「君も母校に絵を寄贈できるぐらいの画家になりなさい」と言われた。僕は画家にはならず舞台美術家になつたが、校長先生との約束を守つて舞台模型を贈らせてもらつた。

「次ぎは須磨の海かな。よく遊んだなあ」と林君が言つたので、須磨に向かう。この浜辺は少年時代の僕にとって大事な場所だった。空襲で街が焼け野原に変わり果て、人の心も変わつたが、須磨の海と空だけは戦争中も戦後も変わらず、僕を慰め励ましてくれた。今は堤防ができる、当時の風景と様変わりをしたもの、やはり故郷の海辺は優しかった。

空模様が少し怪しくなつたので、長楽小学校へ急いで向かう。僕と林君が六年間学び遊んだ校舎は当時のままの姿で迎えてくれた。こ

ことと同じように、重要な課題だと思つた。

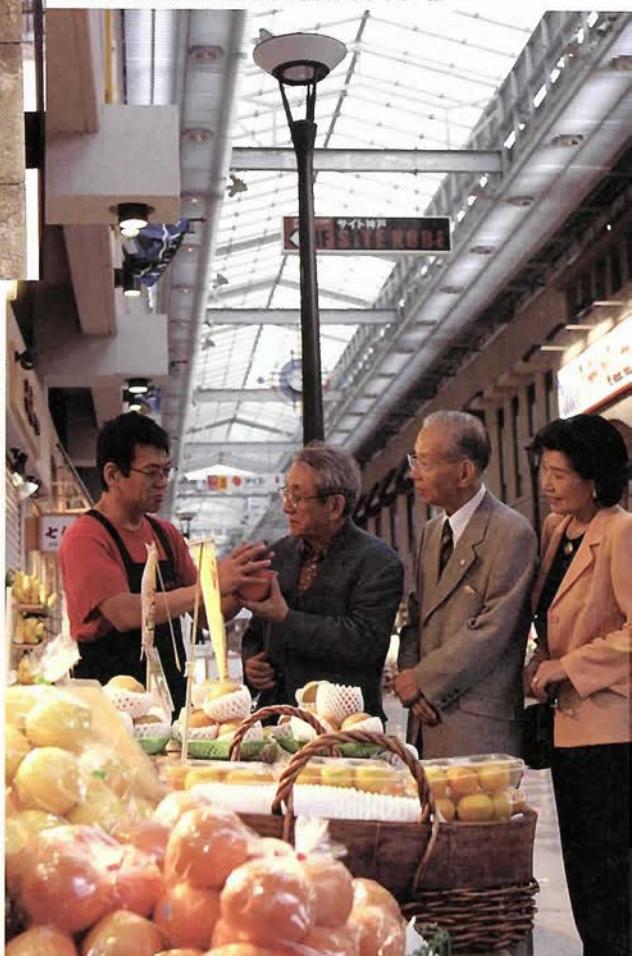
次ぎの場所に移動するとき、妙齢の女性が車で現れた。華道家の木村禮子さんで、兵庫高校の後輩にあたる人だつた。彼女は僕たちの移動に「車を運転しましよう」とボランティアで参加してくれることになつた。

次ぎの目的地の兵庫高校を目指



(写真左) 2人が入学した68年前と変らない長楽小学校校門前

(写真下) 西新聞地大正筋も見事に復興、ちょっと一服



の校舎はあの空襲にも震災にもビクともしなかったのだ。しかし再来年には壊され、新校舎が建つらしい。

「惜しいけど、しゃーないな。今まで元気によく頑張ってたよ」と、玹いていると、林君が「大正筋へ行つてみんか?」「H」が好きやつた街やろ」と背中を押すように言った。車は激しく降り出した雨の中を大正筋へ向かう。

震災の後この辺を

訪ね、酷かつた被害状況をつぶさに見ていたが、再建された町並みは、僕の記憶にある風景とは全く違っていた。喉が渴いたので大正筋の吉田商店で果物のジュースを飲む。店の一家は「家族で『少年H』を読んでたから、著者に会えて嬉しい」と喜んでくれた。中学生の息子さんが「中学二年の国語の教科書に『少年H』が載つているから皆んな読んでる」と言つた。戦争のこととも、震災のこととも、風化させてしまわないよう、次ぎの世代に伝える努力を怠つてはならないな、と改めて思った。

撮影／菊池 満（写真家）